

佐賀新聞 2010(平成22)年2月6日(土) 県内文化欄 連載「近代との遭遇 世界を見る・日本を創る」

佐賀新聞 (第三種郵便物認可)

美の継承—久米桂一郎と父邦武—

久米桂一郎「裸婦習作」
—1886(明治19)年、留学時代

久米桂一郎「美術解剖学講義メモ」から
—大正期

同様にあり、そのためには人の「皮肉筋骨ノ真態」を学ぶ必要があることを記した。この裸婦が「画工の粉本(手本)」にして「人ノ肉体ヲ写スコトハ、画工ノ最モ心ヲ尽ス技倆ナリ」とする邦武の理解が生まれることになった。

蕙育を受けて
桂一郎は、この父邦武の薫育を受けて、邦武渡欧の20年後、パリに留学し西洋画を学ぶ。こうして本格的に画家を志した桂一郎ではあったが、その漢詩文の教養に育まれた生来の気質からか、帰国後は、東京美術学校において美術解剖学を中心とする教育、研究の領野に従事することになる。彼は父が行った西洋画理解を日本において実践的に基礎づけようとしたといえる。

この点において、邦武、桂一郎の2代にわたって美は継承された。そしてその根底には、わが国の近代化における造形美術の分野での視覚と思想の変革が伴っていた。桂一郎と父邦武はこの時代の大きなうねりの中で、西洋を体験し、自らをもってわが国の文化、芸術の礎としたのである。

(県立博物館・美術館副館長 松本誠一) 〓おわり〓

西洋の写実主義研究

久米桂一郎「美術解剖学講義メモ」から
—大正期

ふたつの重要性を強調した。すなわち、自然としての実景から、画家はもっとも感応するところを表現し、そこに画家の無限の精神性が現れるというのである。

そしてこのことはまた、西洋において本来的な自然と考えられてきた人体についても

引き継ぎ、その後、桂一郎は海外とともに「芸術解剖学」(1903・明治36年)を著すことになる。

そもそも西洋美術の根底には、邦武が「米欧回覧実記」に喝破したように、写実主義(リアリズム)がある。すでに江戸時代、長崎を窓口とした情報により、西洋絵画は陰影や遠近法による再現的な表現として知られていた。邦武は欧州での見聞をもとに、「欧州の画法」について、先の近世的見方をさらに深めて「写生ヲ主トシ、法ヲ天然ニトルモノニテ」(米欧回覧実記)から、以下同じ」と自然に学

美術解剖学というのは、一般にはあまりなじみのない言葉であるが、現在、東京芸術大学の芸術学専攻課程において二つの研究分野となっている。その内容は、人体の骨格と筋肉について学び、それを美術の創作や研究に生かそうという学問分野である。いわば「美は(人体という)自然に学ぶ」ということをモット

美の継承—久米桂一郎と父邦武—

日本文化、芸術の礎に

世界を見る・日本を創る

近代との遭遇

SPORT SPOT

県内文化

佐賀新聞